



## 公開シンポジウム「1968年と2009年」

原 武 史

2009年11月1日、明治学院大学白金校舎で、「1968年と2009年」と題する公開シンポジウムが開かれた。国際学部附属研究所長の私を司会者に、小熊英二、加藤典洋、島田雅彦、雨宮処凛の各氏と本学部の高橋源一郎教授をパネリストに予定していたが、小熊氏は体調を崩して出席できず、パネリストは小熊氏を除く4名となった。言うまでもなく加藤氏は元国際学部教授であり、2002年に見田宗介、橋爪大三郎、宮台真司、竹田青嗣の各氏を呼んで公開シンポジウム「9・11以後の国家と社会」を開いたときには、私と同じく司会者をつとめた。

この公開シンポジウムを企画したのは、2009年7月に刊行された小熊氏の大著『1968』上下をたたき台として、「政治の季節」と呼ばれる1968年～72年にかけての時代をいま一度振り返り、あの時代を2009年に考えることの意味について、パネリストとともに話し合ってみたかったからである。加藤氏と高橋氏は、当時まさに大学生だった世代、島田氏、小熊氏と私は、まだ幼稚園児か小学校低学年だった世代、そして雨宮氏はまだ生まれていなかった世代という具合に、幅広い世代にまたがるようにしたのも、この問題を多角的に論じてみたかったからにほかならない。

ただ、肝心の小熊氏が欠席したため、シンポジウムの中身が画龍点睛を欠くものになってしまったのは否めなかった。小熊氏は「穴」を埋めるべく、40分にわたる録音テープを用意し、執筆の意図を説明した肉声が会場に流れたが、録音という制約上、本人との対話は成立するはずもなかった。司会者と小熊氏を除くパネリストが、ともに『1968』上下を通読したうえで感じた疑問なり批判なりを小熊氏にぶつけるなかで、あの時代を立体的に浮かび上がらせようと考えた私のもくろみは、結局失敗に終わった。出版社から書籍化の依頼もあったが、単行本化はもちろん、いっさいの活字化を拒んだのは、ひとえに私自身のこうした判断による。

パネリストとして出席した加藤氏や高橋氏からは、総じて『1968』上下に対する好意的な評価の言葉が発せられた。この点については、『朝日新聞』2009年11月28日夕刊で、藤生京子記者が取り上げている。小熊氏はその後体調が回復し、『文藝界』2010年5月号では、『1968』上下をめぐって小熊氏と高橋氏が対談している。また2010年12月には、国際学部附属研究所の公開セミナーで、小熊氏と高橋氏の対談が再び予定されている。つまり、「1968年と2009年」という公開シンポジウム自体は失敗に終わったが、ここで論じようとした問題は、2010年になってから別の形で受け継がれているわけだ。その意味では、公開シンポジウムを開いた意味はあったかもしれないと考えている。

国際学部付属研究所 20 周年記念公開シンポジウム

1968 年と 2009 年

日 時 : 2009 年 11 月 1 日 (日) 14:00-17:00

会 場 : 明治学院大学白金校舎 3 号館 3201 教室

パネリスト : 小 熊 英 二 (慶應義塾大学総合政策学部教授) ※当日体調不良のため不参加

加 藤 典 洋 (早稲田大学国際教養学部教授)

島 田 雅 彦 (法政大学国際文化学部教授)

雨 宮 処 凜 (作家・ミュージシャン)

高 橋 源 一 郎 (明治学院大学国際学部教授)

司 会 : 原 武 史 (明治学院大学国際学部教授・国際学部付属研究所長)

